

私たちの身近にある活火山・桜島。はるか昔から活発な火山活動を繰り返してきました。

鹿児島を中心とする南九州の遺跡には、桜島などの火山噴出物が何層も堆積しています。国分の南東部、標高260m以上の上野原台地で見つかった上野原遺跡も例外ではありません。今回は、上野原遺跡と火山灰の関係について紹介します。

## 火山灰から判明した事実

遺跡で見られる地層は、下のものほど古い時代を表します。火山灰や火砕流などの火山噴出物は科学分析で積もった年代が特定できるため、出土した遺跡の年代を決める証拠となります。

上野原で見つかった約9500年前（縄文時代早期前葉）の定住集落跡からは、竪穴住居跡52軒、石蒸し料理を作った場所（集石遺構）39基、燻製料理を作った場所（連穴土坑）16基、墓やごみ捨て場などの穴（土

坑）270基、道跡2条などが確認されました。

その中で、10軒の竪穴住居跡の中から「P13」と呼ばれる桜島の火山灰が埋まった状態で発見されました。P13の「P」はパミス（粒の小さい軽石）、「13」は大正3（1914）年の大正大噴火から13回前の大爆発を意味します。この13回前の爆発が約9500年前であることから、集落の年代が特定され、一時期に10世帯程度の集落が作られていたことも分かりまし

# 火山灰が語る 上野原遺跡

た。火山灰のおかげで、約9500年前の定住集落跡が日本で最古最大級であることが証明されたのです。

同遺跡からは、約7500年前の祭りの儀式を行った場所も見つかっています。丘になったこの場所からは、特殊な意味を示すかのように二つ並んだ状態で埋められた一対のつぼ形土器が、全国でも例を見ないほど完全な形で発見されています。周辺で見つかった11個のつぼ形土器や土偶、土製耳飾り、用途不明の土製品、

異形石器なども儀式に使われたと考えられています。遺跡の数や大きさ、土器の種類や量などは全国でも大規模で、西日本に比べ、東日本の文化が古くから発展していたというそれまでの定説を覆す大発見となりました。

## 途絶えた縄文文化

上野原で花開いた縄文文化は、約6300年前で突如途絶えます。薩摩半島の南、約50kmの硫黄島付近に位置する海底火山・鬼界カルデラの

大爆発が原因でした。

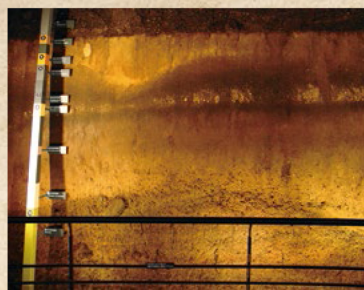
この大爆発は縄文時代最大の噴火で、「アカホヤ」と呼ばれるこのときの火山灰は、関東付近まで降灰しています。降灰や火山灰が引き起こす気候変動により、先進的で成熟した文化を途絶えさせてしまう結果となりました。

遺跡に堆積する火山灰は、現代に生きる私たちに地球の歴史を物語る証しとなっているのです。

（文責＝上野原縄文の森・関）



上野原遺跡の全景



上野原遺跡の地層



約7500年前の出土品



約9500年前の定住集落跡

## 郷土への扉

The gateway to local history